俺の魂を翻訳できるのは鉄しかない!!

鉄のゲージツ家・篠原勝之さん

篠原勝之さん

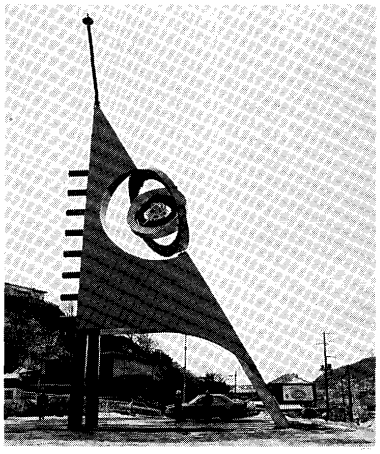
鉄のエネルギーを引き出すクマさんのゲージツ

スキンヘッドのクマさんが目の前にいる，あのクマさんだ。東京都墨田区にある「KUMA'S FACTORY」の奥のテーブルで「どくだみ茶」を飲みながらお話を聞いた。

クマさんは鉄の町北海道室蘭で育った。お父さんは製鉄マンだ。家出してやってきた東京で再び鉄と出会ったのは今から十年ほど前。「ビルの解体現場で火に溶かされ，切られていく鉄を見たとき，無意識のうちに心の中に鉄が蘇ってきたというかさ…。鉄の町で育ったからだろうね」。産業で役目の終わった鉄にもう一度自分のゲージツの力を加えることで，物質のまだ失っていないエネルギーを引き出すのだ。

人間に媚びないとんがった鉄

これまで作品には鋼板やスクラップなど生産された鉄を使っていた。「これからはちょっと製作方法を変えようと思ってるんだ」。今までの製作方法ではクマさんが魅せられている「火と鉄との関わり」の一番おいしい部分を製鉄工場に持っていかれている。これでは物足りなくなったクマさん，山梨にるつぼ式熔解炉を建設中である。そこで銑鉄とスクラップを混ぜて新しい命を作る，言わばもっとラジカルに鉄に迫っていくのだ。クマさんのいう鉄は，チタンやステレンスのように人間の生活に便利にされた鉄ではなく，もっと原始的な力を持った鉄なのだ。鉄とともに発展してきたヒトの生活は，だんだん便利に変ってきた。しかし，その合理追及の過程で捨ててきた部分にヒトが本来持っていた魂や，エネルギーがあったのだとクマさんは考える。そして，鉄もそんな捨てられた合金に鉄が本来持っているとんがった力があるのだと。「鉄本来の力を俺の手と体と火を使ってもっと搾り出してやる」。これがクマさんのゲージツなのだ。



1993年にNHK室蘭放送局に常設されたオブジェ「FŪRAI」

クマさんの鉄のゲージツは，時代の中でその時代の空気だとか社会だとか経済だとかをひっくるめて成り立っていく。「一人でひっそりと匠の技を磨いて造形するコトというのは俺の役目じゃないんだ。もっとラジカルな，もっとアナーキーな鉄の力をエネルギーに変換したいと思っているわけ」。そう，クマさんはエネルギーなのだ。それも物凄いエネルギーなのである。そしてその作品はクマさんのエネルギーを全身で表現している。「エネルギーがなきゃ作品は作れない。作品を作る衝動というのは生きる力のことだから。ゲージツができなくなっちゃったら，消えちまってもいいと思ってる」。

クマさんのタフな脳ミソ

「鉄のどこが好きとかそういうことじゃないんだな。女に惚れるときに，おっぱいが大きいから，髪が長いからなんていってるようじゃまだまだビギナー。鉄に関しても同じでさ，硬いからとかなんとかいってるうちは初級コースだな」。しかし，どうして鉄なのだろう。「俺の魂を翻訳するのに一番適した物質だということだな。真鍮や銅みたいな合金は，加工しやすいけど人間ににじり寄った卑しさがあるね。鉄が一番だ」。解体現場で鉄と出会ったのは奇跡だという。「一生出会わなかったかもしれないんだよ。いくら身の周りにたくさんあっても，自分の方に感じとろう，受け止めようという気がなければフッとやり過ごしてしまう。ぼんやりしてたら奇跡的な出会いはないよ」。そういうクマさんの脳ミソにぼんやりという時間はない。常に来るインスピレーションをタフな脳ミソが受け止め，それを形にすることを考える。それの連続。「映画の撮影のときもね，出番とその前は自分の演る役のことを真剣に考えてる。そして出番が終わるともう頭の中は鉄のことなんだ」，そう語るクマさん。まるで恋をしているようだ，離れていても心のどこかで考えている…と思っているところに一言。「いってみりゃ，性悪女に惚れちゃったようなもんだな」。「えっ？」とクマさんの顔を見直すと「金はかかるし，ゆうことは聞かないし，そのくせ熱いし，困ったもんだ。あげくに，山梨におうちまで作らされちゃって。それでもいいんだからしょうがないわな」と，とろけそうな表情を見せた。

篠原勝之（しのはらかつゆき）

1942年北海道生れ。絵を描いたり，編み物が好きなぼんやりした少年だった。家出後，60年代から70年代にかけて独自のゲージツを確立し始め，画家，デザイナー，絵本作家として過ごす。その後，鉄と再会し，「ゲージツ家」として活躍中。製作した鉄のオブジェは750点を越える。